

1 研究主題

学びに向かう力を育む音楽科の授業を目指して

2 はじめに

合唱や管楽器演奏に配慮が必要な日々が続きながらも、本研究会では、鑑賞領域に着目し研究を進めている。近年の研究により、様々な場面でのグループ活動を取り入れながら、深い学びに迫ろうとする姿は多くの授業で見られるようになってきている。さらに児童生徒自身が、主体的・協働的に学習に取り組み、音楽の楽しさを体験させることや、学習活動に意味や課題を見いだせるふり返りをさせることで、「学びに向かう力」を育むことにつながるであろうと考えた。

3 研究経過

研究推進委員会が中心となり、愛知教育大学 新山王政和教授にご指導いただきながら授業研究を行った。校種の壁を越えて授業を参観することにより、それぞれの発達段階でどのような学びが積み重ねられているのかを知ることができ、9年間のゴールを見据えた授業づくりに生かすことができた。

また、各自レポートを持ち寄って、小学校部会（低・中・高学年）、中学校部会に分かれて授業の実践報告・協議を行った。レポートの内容以外にも、新学習指導要領に適した評価の仕方、感染対策を講じた日々の授業アイデアや悩みなどを気軽に相談し合い、情報交換をすることができた。



4 研究の概要

鑑賞を中心とした授業でも、歌ったり指揮や手拍子などでリズムを感じ取ったりする表現活動を取り入れながら、言葉以外のコミュニケーションをとる授業実践を2つ紹介する。

(1)実践例1 短調のひびき『マルセリーノ』『ハンガリー舞曲第5番』（小5）

本単元では、『マルセリーノ』による表現活動と『ハンガリー舞曲』による鑑賞を相互に関連させ合い、曲想や調など音楽を形作っている要素を聴き取りそれらによる働きが生み出す良さや美しさ、面白さを感じることで児童の感性を育てていくことをねらいとした。

鑑賞の授業では、『ハンガリー舞曲第5番』の特徴づけている音楽の要素を体で感じるために、身体表現を取り入れる。音だけで聴き取ることが困難な児童にも、視覚的・感覚的に変化を捉えやすく楽しみながら音楽を体感することができた。指揮をする児童、指を鳴らす児童、机で拍を刻む児童、頭で頷きながら拍をとる児童、メロディを指で追っている児童など、いろいろな身体表現があっても、互いを尊重しあう雰囲気ができているからこそ安心をして音楽を聴くことができていた。また、感じたことをグループや全体で対話する時間をしっかりと確保することにより、新たな発想や感じ方を知り、自分の考えを深めることで、より楽曲を味わって聴くことができた。

(2)実践例2 曲の構成に注目しながら曲想の変化を味わう

『交響曲第5番ハ短調』（中2）

本単元では、交響曲第5番が現代の人々にも長く愛されている魅力を見いだすために、形式美や構成に着目した。第1主題に絞り、音源を繰り返し聴いたりスコアを読み解いたりしながら、様々な楽器が織りなすオーケストラの響きと動機の繰り返しや変化を感じ取った。次時では4人グループで、音源に合わせてながら紙コップを使ったリズムアンサンブルをした。生徒たちは、なんども音源を聴き音の強弱や速度の変化以外にも、音の重さや動機の重なり方を感じながら表現することができた。

何度も音源を聴いたり、感じたことをグループで共有したりすることで単元の最後に書いた批評文では、より多くの音楽の要素を用いて書くことができた生徒が増えた。

5 今後の課題

実践報告によると、ペアやグループで仲間と関わりながらまなび合う様子は、市内の音楽の授業で定着しており、さらに子どもが深い学びに迫るためにどのような手立てをしていくか話題になった。お互いを認め合ったり、苦手なことを助け合ったりすることで、子どもたちの意欲が高まり、思いや意図をもって表現しようとする力の育成や、少しずつではあ



るが技能の向上につながっているように感じる。しかし、限られた授業時間の中で、技能や表現力を身につけていくためには、教師側のさらなる教材研究や、教育課程の弾力的運用が必要である。また新たな課題として、発達段階に応じた効果的なICT機器の活用の仕方も話題になった。実践報告を元に自校で取り入れたこと等を、意見交換をしていきたい。

今後も、音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育みながら、「主体的・対話的で深い学び」を目指して研究を続けていきたい。